

総 括

田 中 毎 実(京都大学高等教育教授システム開発センター教授)

(田中) 最後になりましたが、パネリストのお3人、どうもありがとうございました。それから、フロアーの方々も積極的に討論に参加していただいて、どうもありがとうございました。この3人の方は、それぞれ大学の教育評価ということになれば必ず名前が出てくる方々です。しかもお3人の立場はそれぞれにまったく違う。だから、喧々諤々けんかしてくれるだろうと予期しておりました。その点は、少し裏切られました。安岡さんまで、「結局最後は大山と一緒にだよ」なんて言われまして、びっくりしてしまったのです。

それはともかくとして、「一緒にだよ」と言いながら、些細なというか、小さいかどうかわかりませんが、評価について語る文脈が3人それぞれに違う。このことは、よく通じたのではないかと考えています。ですから、私は、そもそもどう違うかということを問題にするのではなくて、どうして「一緒にだよ」と言っているのかという点を大事にするべきだと思うのです。

それはどういうことかという、たとえば館さんは、評価の問題は最後は自己評価がどれだけできるのかというのが勝負どころだと言われていたようなニュアンスがありました。それはまったくそのとおりです。私たちは、外部からの評価であろうが、何であろうが、それらをまず自己評価として受けとめる力量をつけるべきです。そのときにはじめて、私たちは、いろいろなものに対して拒否したり、受け入れていったりする力を持ったことになるわけです。それは当然のことながら集団的な自己形成だから、FDになるわけです。

ですから、今日の結論は、館さんの言葉を使えば、私たちが自己評価をまともにできる主体、組織的な主体、個人的な主体になれるかどうかを試金石なのということなのだろうと思います。

大山さんの言葉でいいますと、それはたぶん評価のリテラシーということにかかわってくるだろうと思うのです。ですから、3人が一致しておられる点、安岡さんも含めて一致している点は次のようなことです。評価を外部から来た嵐というか、害というか、そのように受け取るべきではありません。これを、私たちが自分たち自身で評価をしていきながら、ファカルティとしての教育力をつけていくためのきっかけにできるかどうか。これが問われている。このように受け取るという点で、たぶん3人のニュアンスはとてもよく似ているのです。

こんなに違った3人に来ていただきましたのに、結局、最後のところは一致してきたのです。たぶんこれが私たちの一番大きな問題なのだろうと思っています。あまりきちんとしたまとめになりませんが、感想としてはそういうことではないでしょうか。